
天に海原 土に雲

小鳩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天に海原 土に雲

【Nコード】

N4495S

【作者名】

小鳩

【あらすじ】

帝都の闇には、鬼が潜む。

瀟洒なビルの一 corner。

その部屋に訪れた客は、真白の髪の男に頼む。鬼を退治してくれと。

明治ノ大正時代のレトロな世界観をイメージした異世界ファンタジーです。

きみがため 一（前書き）

このお話はサイトに載せている短編を大幅に改稿したものです。
名前は違いますが、本人ですのでご心配なく！

お話の都合上、前置きなく流血描写などが含まれる恐れがありますので、苦手な方はご注意ください。

それでは、少しでも楽しんでもらえたら嬉しいです

きみがため 一

行燈に火が入れられた。

ぽつ、ぽつと赤い明りに照らされた道に華やかな女たちの笑い声が色を添える。

朱塗り格子の店々は、それぞれの花紋を象った提灯を軒先につるし夢現の里を作り出す。

気の早い客を捕まえた店では、既にチンシャン、トンテン賑やかな楽の音が響いている。

抜いた襟も粋な女たちは、思い思いの絹で身を飾り、紅を塗り、細い手で男の袖を引く。

此処は、色街。女街。

笛に太鼓、三味線、琴に琵琶。奏でられぬ楽器は一つとしてない。唄を歌えば、それにあわせて扇がひるがえる。

極上の夢を見るには、他にない。

此処は、色街。女街。

絢爛豪華な遊幻の里。

朱塗り格子の隅でお茶を挽いていた蕎麦（そうあん）は、手元の扇をくるりと回した。

夜も更けて、通り過ぎる男たちの数も増えて行くばかりに見える。

黒髪に飾った簪が、ちりりと小さく音を立たす。

格子の前には、鮮やかに着飾った女たちが隙間なく群がっている。暗がりに浮かぶ白い腕が妙に生々しく蕎麦の目に映った。

一人の女が男に選ばれて張り格子を出て行く。

取りすました笑顔で出て行く仲間を周囲は、妙な緊張感と共に見送る。

霜月も半ばとなった今は、張り店の中は凍える寒さだ。相手がどんな男であれ、彼女は少なくとも数刻は温かな布団の中で過ごせるだろう。

火鉢を入れられているとは言え、格子のみで区切られた張り店の中はかじかむ寒さだ。

ほうつと唇から洩れた吐息は、ふわりと白くたなびいた。

そろそろあの格子の隙間から手を伸ばして、手ごろな男を見つけなければ凍えてしまいそうだ。

そう思いながらも、なかなか蕎麦の腰は上がらない。

気鬱を抱えながら、ふつと逸らした視線の先にその男を見つけた。

行燈の光を避けるように立つ男は、今では珍しい編み笠を目深に被っていた。

くたびれた袴に草履姿の男は、どう見てもこの辺りの者ではない。

帝都からの客がほとんどのこの花街では、洋装の者がほとんどを占めている。

たまに着物姿のお大尽がいたとしても、この男のような粗末な形をしている者はいない。

だが、時折貯めに貯めた小銭かき集めてやって来る客がいなければ、ない。

一度この街に足を踏み入れたなら、すぐにその虜となり一度が二度に、二度が三度になるのが当たり前だった。

この男もそんな人間の一人なのだろう、蕎麦はごくあっさりとう見極めをつけた。

どんな人間であれ、お代を落としてくれるのならお殿様だ。

普段の蕎麦であれば、さすがに声をかけなかったかもしれない。

だが、今日のように冷える夜は薄い打ち掛け一つでは堪える。

それにまだ一重の蕎麦には、鼻筋の旦那もいない。

八重や九重、それに百花の花魁ともなれば鼻筋の旦那衆が五十人だって百人だっているものだが、駈け出しの蕎麦には夢のまた夢だ。萌葱の打ち掛けを捌いて立ち上がった蕎麦は、じつと動かない男へ

と声をかける。

「そんな所で足休めですか、旦那様？」

格子の隙間から暗がり立つ男の、擦り切れた袖にそっと指を伸ばす。

「お疲れなら、うちで休んで行かれませ」

紅を刷いた唇を意識して微笑ませながら近づいて来た男の腕を引く。長いこと外にいたのか、男の肌は思わず身が震えるほど冷たかった。

「こんなに冷えて。ゆっくり温めて差し上げましょう」

銅像の様だった男の足がまた一歩動いた。

薔杏は、につこりと微笑んで歩む男を格子の内側から追い駆ける。

これで今夜は温かな部屋で過ごせる。

ひと時の後、襖が開いて女将が薔杏を呼びに来る。

あの編み笠の下はどんな顔だろうか。

行燈の明かりでわずかに窺えた口元は、幾分か若い男の様だった。

どんな顔の男だろうと微笑んで酌をする自信はあるけれど、そんな事を考えながら客間の襖を開いた。

店では一番小さな客間に、その男は静かに座していた。

行燈に照らされた男の容姿を見て、一時薔杏は言葉を失くした。

わずかにやつれた風情が見えるが、それすらも男の整った容姿を飾り立てているようだ。

こんな男振りの良い旦那は、八重の姐さん方だって持っていないだろう。

胸を高鳴らせた薔杏は嬉々として男へ侍った。

今宵の己の幸運を信じて疑わなかった。

帝都の東。

大きな馬車通りを一つ奥へ入った静かな通り。

その道沿いに建っている煉瓦造りの瀟洒な造りの四階建てのビルが

建っている。

わずかに青味があった独特の白煉瓦を使った入り口を通くぐると、正面には古びた階段が見える。

軋む階段を上って行けば、何度目かの踊り場を過ぎた所で目的の扉を見つけることが出来る。

使い込まれた深い黒檀の扉。半円の曇りガラスの向こう側を窺うこととは出来ず、代わりに銀の塗料で月と群雲の鐫紋が刻印されている。専門職を意味するその紋は、こちらでも年月を感じさせる古さで掠れ消えかかっている。

ひっそりと静かな扉の取っ手を無遠慮に回したのは、黒い革手袋を身に着けた手だった。

滑らかな光沢を放つそれは一目でそこらの量産品とは違う事を示している。

皮手袋の持ち主は、扉脇のノッカーには目もくれずに扉を開け放つ。

「まったく冬だ！」

部屋に入っただの第一声を高らかに上げた青年に、室内で悠々とソファに寝そべっていた影が身動きした。

「世々（せぜ）・・・」

いかにも億劫そうに起き上がったのは真白の頭。

レースのカーテンが掛けられた窓辺から差し込む陽の光で、白髪はまるでガラス系のようにキラキラと輝いている。

人の身を飾るには異質な輝きを乗せる髪だったが、それ以上に目を引くのは青年の目元を完全に覆ってしまっているサングラス。

日の光を遮断するガラスは青年の顔立ちを曖昧にも、逆にひどく印象付けているようにも見える。

どちらにしろ、その際立った容貌を隠しきれてはいない。

「ああ、藤魅（ふじみ）。冬だよ、まったくもって冬だ。昨日まで秋だと思っていたのに、何だろうねこの寒さ！」

まるでオペラッタの劇団員のように朗々とした声が響き渡る。

世々は、着込んでいた狐の毛皮の防寒着を玄関脇のコートハンガーにかけると手にしていた荷物をごっそり机の上に置いた。

「せっかく今日は、秋刀魚を買ってきたというのに。これでは塩焼きではなくつみれにして鍋にしなれば」

「鍋でも塩焼きでも好きにしてくれ」

ひどく真剣な顔で、今日の夕飯を吟味する友人に藤魅は呆れたように相手にするのを止める。

元の通りにソファに長い足をもてあまし気味に寝そべった姿を今度は世々が嘆かわしいと視線を向けた。

横になつていても外さないサングラスは邪魔でないのかと世々はいつも思うのだが、どうやら少々の事ではズレたりしない特注品であるらしい。

いつものように寝て居るのか、ただ横になつて居るのか判別に迷う藤魅のそっけない態度に食材を貯蔵庫にしまっていた世々は肩を竦める。

食こそ全ての原点だと自負している世々にとって、飲食に淡泊な友人は理解しがたい存在だ。

もともとは帝国高等学院時代からの友人と言うには細い繋がりで付き合ってきた二人である。

あの時の事件が起こらなければ、世々はおそらく学院を卒業した次の日から藤魅の存在など忘れてしまっただろう。

だが、幸か不幸かあれから五年の月日が流れても関係は潰えてはいない。

「やはり今日は鍋だな。人参も白菜も備蓄はたっぷりだ。白味噌はこの前買い付けたものが残って居るし」

台所に立ち真剣に野菜を吟味する、平均身長を遥かに越えた優男。摩訶不思議な光景だが、此処では日常の一部だ。

「葱は、朝の残りがあるし。おお、完璧だ！」

どうやら夕食が決定したようだ。

いそいそと手袋を外すと早速下ごしらえに生姜をすり始めた世々だ

つたが、間髪いれずに響いた来訪者を告げるノッカーに彫りの深い鼻筋に皺を寄せた。

「・・・世々、客だ」

出る気など毛頭ない、と宣言する一言に世々は香りの良い生姜の一口欠けを見つめてからため息を吐いて扉口まで出向いた。

「どうぞ、そちらへ」

客を迎えた世々は、この部屋の主である男が寝そべる長椅子の前へとお客を通し、唐絹のクッションを置いた籐椅子を勧める。

やって来た女は、わずかに驚いたように目を瞬かせたがすぐに微笑んで一人掛けの椅子に腰を下ろした。

卵色の地に桔梗の染め抜き。帯は千鳥の刺繍が施された粋なもの。肩に巻かれた濃紫のシヨールをそっとほどいた女の年齢は、三十路をいくつか過ぎたほどか。

身なりは良いが、華族、豪商などの出自とは違うようだ。

藤魅のある種異様な風体にも動じないのが良い証拠だ。

客を迎えているとは思えない態度も気にせず女は、帯裏からすっと一枚の札を取り出した。

千代紙で飾られたそれに書かれているのは、色街でも名の知れた店の名前。

「私は胡染楼こせんろうで女将をしております、落草らくそう（ふきくさ）と申します」

花札と呼ばれる名刺をどうにか起き上がった状態で受け取って無感動に眺める。

「今日はお仕事を頼みに参りましたの」

真っ直ぐに色の濃いサングラスで隠された目を見据え女は切り出した。

「どついつた類の？」

大した反応を示さない藤魅を気にもかけず、女、落草はにっこりと笑った。

「鬼退治を、お願いしとつございます」

「始まりは些細な事でした。ひどく冷え込んだ晩の事で、うちの子が一人体調を崩して寝込んでしまいましたの。もちろんお医者に見せて、休ませていました」
落草は淡々と説明していく。

半分伏せた目で、ゆっくりと状況を思い浮かべ、なるべく正確に諳んじているようだった。

「ですが、数日もしない内に息を引き取りました。見る影もないほど痩せこけて哀れな姿でございました。それから、また一人同じような症状で寝付いたのです。こちら三日ばかり寝込んだまま……いくら悪性の流感だとしても異常でしたわ」

そうして一週間という短い期間で立て続けに四人の娘が亡くなった。

医者に言っても原因がわからないと首を捻るばかり。普通であればあり得ない事だと、薄気味悪そうに呟いたそうだ。

「ですから、もう最後は此処しかないかと思ひまして。これ以上は、店だけでなく花街全てに関わります。早急に手を打ちたいのです」
言い募る女の口調は強い。

女一人、侮られては不愉快だと気負いなど欠片も見せず、微笑んでみせる、その強さ。

凜とした眼差しに、藤魅はわずかに沈黙した後、頷いた。

「……噤真（つぐま）」
呼ばれたのは今まで何処に身を潜めていたのか訝るほど存在感のある少年だった。

長い前髪は片目だけを隠すように垂らされ、他は形の良い頭に添うように整えられている。

白いシャツに黒いリボンタイ、膝丈のズボンには白い靴下と革靴を

合わせた格好だ。

何処の良家の子息ともしれぬ格好は、人形の様な少年の白い面貌によく似合っていた。

静々とした足取りで噤真は、藤魅の元へと歩む。

手には抱えるほど長い得物を携えている。

黒漆に銀の群雲が刻まれた優美なしつらえの、それは紛う事なき一振りの太刀だ。

無造作に刀を受け取ると親指で鍔を押し上げ、現れた鋭い光を放つ刃にぐつと親指を押し付ける。

ぷつりと皮膚が裂け血玉が浮き上がった。

噤真はその間に、近くの文机に置いてあつたすずり箱から半紙を一枚取り出し藤魅の前に置いた。

染み一つない半紙に、血に濡れた指先を強く擦り付ける。

一の字を書いたそれを折りたたみもせず箆草の目の前に滑り寄せる。

無言の要求に箆草が柳眉を顰めると、取り成しに世々が割って入った。

折角の一月ぶりのお客だ、逃がす手はない。

むしろ、逃がしてなるものか。

…などと言った、がつつきは欠片も見せずにはこやかに説明の口上を述べる。

「こちらは、我々とお客様との間に交わす誓約書となります。こちらの下にお客様のお名前をお書き下さい」

そつと卒なく墨と筆も差し出す。

少し迷う素振りだった箆草だったが、納得したのかしゅるりと半紙に流麗な文字を連ねた。

名前がしっかりと書き込まれたのを確認した世々は、空いた隅に同じく墨で何ごとかを書き添えた。

最後に吸い紙で浮いた墨汁をしっかりと吸い取ると手早く半紙を折りたたみ、くるりと結んでしまう。

手のひらに隠れるほどの大きさになったそれを世々は、にこやかに差し出した。

「どうぞ、お持ち下さい。これは守りの代わりにもなります。身に着けておけば些少なりとも影響から逃れられるでしょう」

「護符と言ふ事かしら。では、ありがたく頂戴します」

花札と同じように帯びに挟んで落草は手にしていた袱紗から何やら取り出した。

「料金の前払い分はこちらに用意しております。早めに終わらせてしまいたいと思っておりますから、今日の暮れ時にはうちまで来てくださいな」

それだけ言つと女主人はスツと立ち上がる。

世々もあわせて見送りに立ったが、藤魅は相変わらず怠惰に横になつていただけだ。

玄関先まで進んだ落草は最後にちらりと中の主を振り返つて、背後の世々に呆れたような本音を漏らす。

「仙坊のご隠居の紹介で来たけれど、本当に大丈夫でしょうね」

あれではまだ小坊主の方が信用できそう。

あまりと言えばあまりの評価だが、藤魅のあの姿で正しい評価を得ようとする方が間違いである事は重々承知している。

だからこそ、自信たっぷりには世々は頷いて見せた。

「ええ、あれでも帝都一の退治屋ですから」

薄闇が辺りを閉じ込め始める時分。

空は朱から緑、緑から藍墨へと色を変えてゆく。

朱と黄色が交じり合う境界には、一番星が何かの証のようにきらめいている。

雪洞が次々と軒に連ねられていくのを横目に気の早い旦那衆が界限をうつろつき始める。

鼻肩の花妓かじがいる者は、もつと宵が迫つてから来るものだが、ちよつと新しい妓こでも見繕うかと足を向けた者たちはあそこはどうだ、と次から次へと店を行き来する。

「鬱陶しい所だな」

周りの熱狂から程遠い淡々とした口調、足取り。

長い足を最大限に利用して藤魅は顔見世大路と呼ばれる大通りを歩いていく。

白髪に目元を覆う細身のサングラス、踝まである長いアイボリーのコート。内側には黒漆の太刀が仕舞われている。

異様な風体集まる注目すら遮断して歩く藤魅の後ろを、これまた色街では不似合いな上品な顔立ちの少年が続く。

いろいろな意味で目立つ二人連れだったが、彼らが一際大きな灯籠の飾られた店の暖簾を潜ったところで全ての視線は外れた。

薄紅で芍薬と胡蝶の紋様が描かれた灯籠の脇には、品良く店の名が添えられている。

多くの男たちが心躍らせて足を運ぶ店に何の感慨もなく足を踏み入れると雅やかな世界が広がった。

磨き上げられ柔らかな金色に光る廊下。

朱塗りの柱。

奥を見せないように垂らされているのは、艶やかな織物だ。

山中の鹿や鳥が色鮮やかな豪華な絹糸で表されている。

これだけで木綿の着物が十は買える。

「ようこそお出で下さいました、旦那様」

しやなりとした白い指が床に添えられ、深緋の衣が泉の様に広がる。

結い上げられた黒髪には、びらびら簷が揺れる。

笑みを刻んだ唇には、たつぷりの紅が差されている。

藤魅を見てもその微笑みは揺るがない。

誇惑的な表情は意図的に作り出されたものだとしても、十分に魅力的だ。

ごく一般的な男にとっては。

「客じゃない。落草はいるか？」

切って捨てるような藤魅の言葉に、出迎えの女は一瞬鼻白んだようだったがすぐに立ち上がると近くに居た年若の娘に何ごとか言伝する。

まだ結い髪ではない少女は、奥へと駆けて行った。

嗜める声が聞こえて、足音は静かなものになる。

そうして、さほど待たずに落草が現れた。

他の女たちとは違い、床を擦る打ち掛けはなく濃い紫の単を粋に着こなしている。

髪も蝶の様に張り出した物ではなく、後ろで膨らみを持たせて一つにまとめた地味なものだ。

「少し遅いようだけど、来ていただけで何よりだわ」

上がって、と促されて履いていたブーツを脱ぐと滑らかな板張りへと足を上げた。

ついて来ていた嚙真も同じく革靴を脱いで、こちらは藤魅が脱ぎ捨てたものと一緒に丁寧に靴を揃えなおすと小走りに後を追う。

藤魅が通されたのは、客を迎え入れる部屋ではなく、花妓たちが身を休める奥部屋だ。

日当たりのよろしいとは言えない陰部屋だが、代わりに窓は大きくとって換気は十分出来るようになっていいる。

寝て居るだけで病を得てしまいそうなかび臭い長屋に比べれば、数段マシな造りだと言える。

襖が並ぶ廊下を歩いていけば、時折苦しそうな咳や息遣いが漏れ聞こえる。

落草は何の感情も伺わせない淡々とした表情で、ひとつの襖を開けた。

二人分の布団を敷けばそれで手一杯の狭い部屋。

そこに寝て居るのは、一人の女。

普段は化粧できらびやかに微笑んで居るはずの女が一人、蒼褪め瘦

せこけた顔で荒い息を吐いて寝込んでいた。半開きの唇はカサカサに乾き、虚ろに見開かれた目は血走り何処へともなく彷徨っている。

明らかに尋常ではない姿で眠る娘の枕元に膝を付いた藤魅は、冷静に手を取り、首元を観察し、おもむろに浴衣の袷を剥いだ。さすがに驚いた落草が口を開くより前に、藤魅は嚙真を呼ぶ。

少年は素直に傍に寄ると、肌蹴られた胸元に躊躇いなく左手を伸ばした。

良く見れば、少年の左手は包帯に巻かれ素肌が覗く場所はない。

「どうだ？」

落草には全くわからない流れだが、口を挟める雰囲気でもなく黙って部屋の隅で二人の様子を見つめる。

じつと黙りこんだ嚙真は何かを探すように目を伏せている。

しばらくその状態が続き、黒目の大きな瞳が開かれる。

無表情のため気付き難いが、目だけを見れば子犬の様な風情を持つ少年だ。

「何か感じたか？」

藤魅の再度の問いかけに、嚙真はこくと頷いた。

片側を覆った真黒の髪が頷いた拍子に揺れ、隠された奥が一瞬露わになる。

やわらかな稜線を持った頬は、まるで片側と変わらない。

だが、大きな黒目がちの瞳があるはずのそこには、暗い淵が覗いている。

目蓋は縦に裂け、横も同じようにして十字の裂け目が走っている。

明らかにただの人間にある傷ではない。

だが、それもすぐにまた前髪の奥に隠れてしまう。

「鬼で間違いないな」

もう一度、こくと頷きが返って来るのを確認して藤魅は立ち上がった。

「他の部屋も見せてくれ」

「良いけれど。何処も変わりはなくだよ」

「それは俺が決める」

突き放す藤魅に落草は、鼻白んだようだがしゅるっと組んだ腕をほどいて案内に襖を開けた。

「噤真、もう良い。行くぞ」

肌蹴た袴を直していた噤真は、こくりと肯いて出て行く藤魅を追いかけた。

藤魅はそれから、奥向きを回り、客間を全て見て回った。

さすがにこの一体でも名の知れた大見世だ。

回りきるだけでもかなりの時間が経った。

既に、客が大勢行き来している。

落草は、すれ違う客に丁寧な頭を下げながら厭うことなく藤魅を連れて歩いた。

それに対して、藤魅は一つ一つの部屋へと立ち入りゆっくりと見渡すとすぐに出て別の場所へと案内を頼む。

何の確認をしているのか、まるでわからない。

だが、その部屋ごとに何かしら呪いをかけている様子があった。

その部屋の柱に薄様の紙を貼り付けていたからだ。

「あの子は、助かるかしら」

最後の一室を確認していた藤魅は、ふつと聞こえてきた独白に振り返った。

二階の格子窓から人の途絶えない大通りを見下ろして、落草は今まで見せなかつた憂いと共に呟いていた。

「ここにいるのは、どの子もみんな親から売られたり、捨てられたりした子ばかり。男に体を売って、嘘を売って。最期があんなものなんて、余りに哀れだわ」

「・・・鬼に魅入られたのは、寂しさからか」

「え？」

問い返した落草は、ほつれた髪をついと直すと何を考えて居るかわからない男を見返す。

「鬼は、そこにいるだけでは人間に害は与えない。鬼が人間に影響を及ぼすのは、人間が望んだからだ」

「招き入れたのは、こちらだと言うの？」

「そうだろう。呼ばなければ、あいつらはこちら側に来る事も出来ない」

「・・・呼んだ？」

一人考え込む落草に、藤魅はぴくりと指を跳ねさせた。

「来たな」

好戦的な笑みが一瞬だけ、その白麗の顔を彩る。

即座に身を翻した男に落草は慌てて、その後を追う。

「待ちなさい！もうお客人も大勢いるのよ。下手な大立ち回りは遠慮して頂戴！」

ハッキリした主張に、藤魅はわずかに足を止めて落草の方を見た。

「考慮しよう」

甚だ心もとない首肯に、落草は天を仰いで息を吐いた。

きみがため 一 (後書き)

感想や誤字・脱字のご報告など頂けたらとっても嬉しいです！

きみがため 二

薔杏は、遠くから聞こえて来る物音によってまどろみから目覚めた。炭が崩れ落ちる音が静かな座敷に響く。

ゆっくりと身体を持ち上げると、厚みのある羽毛の布団が滑り落ちる。

傍らを見ると、大きな布団には薔杏だけで、先ほどまで居た筈の愛しい人の姿はない。

敷布団に手を伸ばすと、ひんやりとした感触だけを伝えて来る。

重い頭を上げれば、乱れた髪から簪が落ちる。

薔薇の花を象った平打簪は、透かし彫りの施されたごく有り触れたものだ。

真鍮で造られたわずかに年代を感じさせる簪は、ここ最近の鬘履客から貰った物だ。

未だに名前すら知らず、それでも数日に一度は訪れてくれる。

薔杏が傍に侍っても、ほとんど会話らしい会話は無い。

ただ黙って酒を飲む男に付きそうだけだ。

それでも、薔杏は会う毎に男に惹かれて行った。

ほんの数刻しか会えない、ただの客の一人。

惚れては辛いだけだと知っていても、走り出した心を止める術は知らない。

ほうつとため息を吐いて、傍らに脱ぎ落されたままの長襦袢を取り上げる。

鬘履の旦那が付いて一重から三重となった薔杏だが、まだまだ勝手が出来る立場ではない。

用意されてある湯盥で簡単に身体を清めると、身支度を整える。

鏡台の前に座って、ほつれた髪を櫛で梳き上げる。

平打簪を前髪に挿して、色の落ちた唇に紅を刷いた。

小指でそつと下唇に色を置くと、色街の花妓かしの姿が出来あがる。

鏡に映る女の姿は、美しくはあったがどこか悲しげで憂鬱そうだ。打ち掛けの本衿をシュツと正すと、心を決めて立ち上がった廊下へと出た。

今まで遠かった物音が、ぐっと近くに聞こえて来る。

「何だか、騒がしいわね」

呟いたが喧騒はいつもの事でもある。

薔杏はそのまま女将へ上がりを報告する為に階下へと向かった。

部屋を飛び出した藤魅は、真っ直ぐに階段を目指した。

磨き上げられた大階段を音もなく駆け降りて行く。

階段に差し掛かった所で落草は追うのを諦めた。

身動きの取りにくい和服姿のせいでもあったが、例え藤魅と同じ洋装であっても同じだっただろう。

息を上げて足を止めた落草の横を小さな嚙真が追い抜いて行く。

藤魅と同じように、まるで重さを感じさせない走りだ。

まだ十歳ほどにしか見えないが、すぐに藤魅に追い付いてしまう。

二階の廊下の突き当たり付近で立ち止まっていた藤魅を見上げて、嚙真はじつとその反応を待った。

「…消えたか？」

耳を澄ませて周囲を窺うが、宴席の賑やかさとそれに混ざるような三味線の音が聞こえて来るばかりだ。

「藤？」

声変りをする前の柔らかな声が、藤魅にかけられる。

藤魅は、すぐ傍らにある小さな丸い頭を乱暴に撫でた。

「少し、確認する」

こくりと肯いた嚙真は、乱れた髪を両手で撫でつける。

「何か感じる所はあるか？」

聞かれた嚙真は、一歩前に出て今しがたの藤魅と同じように辺りを

見回す。

黒々とした大きな瞳が、廊下の隅々まで見回して行く。
やがてすつと幼い指先が一つの部屋を指差した。

「そこ」

一見、指示された場所には何も無いように見える。

あるのは白木の壁だけだ。

だが、藤魅が近づいて手を添え力を加えるときあたり、と小さな音がして壁の一部が回転した。

「隠し通路か」

「…そんな所にいたの」

背後からようやく追いついた落草が、息も絶え絶えな様子でやって来る。

突き当たりで立ち止まっている二人に訝しげな顔をしていたが、藤魅の手元を見てわずかに顔色を変えた。

「何をしているのかしら？」

「この通路は？」

落草の質問を一切無視しての質問返しに、さすがの女将みも不快感を露わにする。

ただし、それを一瞬で抑えて見せたのは流石の胆力だった。

「ここは花街ですから。身分あるお客様も多くいらつしやいます」

何がしかの理由で表玄関から入れないお客や逆にひっそりと店から出る必要のあるお客の為に。

そう言った後ろ暗い理由を持つ客は多い。

さらりと答えた落草は、眉を跳ねあげてそれ以上の追及を拒む。

藤魅もそれ以上の答えは望まない。

「入るぞ」

「ちよつと…！」

問いかけでもなくスツと身を壁の奥へと滑り込ませた男に、さすがの落草も声を荒げる。

追い駆けるようにして落草が続き、じっとしていた嚙真も隠し通路

へと踏み込んだ。
静かに回転扉が閉まってしまえば、そこはいつもと変わらない磨き上げられた壁があるだけだ。

窓のない隠し通路は、扉が閉まってしまえば暗く閉ざされる。けれど、所々足元の壁から薄く光が漏れている。

耳を澄ませば聞こえて来る嬌声から考えて、隣は客間なのだろう。どう言った細工が施されているのか、隣り合った部屋から光を取りこんでいるようだ。

おかげで危なげなく進むことが出来るようになっていた。

足早に進んでいく藤魅の後ろを小走りに追い駆ける落草は、その迷いない足取りに眉を顰めた。

目元を覆い尽くしたサングラスが外された気配はない。

この暗がりの中、それでも足取りは一筋も乱れない。

「どう言う目をしているのかしら」

一人呟いた筈の言葉は、静かな通路では思いの外良く響いた。

ちらりと振り返った藤魅を落草はまっすぐに見つめ返す。

暗がりには薄っすらと浮かびあがる白皙の美貌は、やはりサングラスによって半分は隠されている。

「気を悪くしたのなら、ごめんなさいね」

肩を竦めて軽く謝罪を口にすれば、興味もないとすぐに藤魅は正面に向き直ってしまう。

本当に愛想のない男だ。

ここまで徹底しているといっそ小気味良く思えて来るから不思議だ。角を幾つか曲がった頃、下へと続く階段が見え藤魅は足を止めた。そこからは、本当の暗闇が広がっている。

「少し待ってちょうだい」

声をかけた落草が、左手側の壁を手で探る。

しばらくして、小さく擦れる音がしてぽつと火が燈る。

どうやら壁に仕掛けを作って蝋燭を仕込んでいるらしい。

ご丁寧に燭台まであった。

無言で渡された明りを受け取って藤魅は、暗い階段を下りて行く。ゆっくりと進んでいくと次第にちらちらと蝋燭の火が揺らめくようになった。

続けてすすり泣くような音も聞こえ始める。

階段を降り終えた頃を見計らうようにして、火がかき消える。そこまで来ると吹き抜ける風が肌でも感じられるようになる。

「外か…」

「ここから店の離れの方に出られるようになってるわ」

落草の言葉通り、指示された先は扉の形で明りが染み出ている。躊躇なく扉を開いた藤魅の頬を凍える夜風が吹きつける。

遠くから三味線と行き交う人の声。女たちの嬌声が絶え間なく聞こえて来る。

「何も無い様だけど？」

同じく外に出て来た落草が、寒そうに腕を抱えて辺りを見回す。

見えるのは、離れと言うには華やかな造りの館だけだ。

ちょうど雪隠を目隠しにする形で出入口が設けられているらしい。すぐに離れへと入る事も出来るようになっており、目の前には外へと続く屈み戸が設けられている。

ぐるりと見回した藤魅は、夜風に乱された白髪を片手で梳き上げ、小さく息を吐いた。

「逃げられたか。…噤真」

嘆息と共に呼ばれた噤真は、指示を受ける前に走り出して行く。

そのままぐるりと離れを一周して、藤魅の下へ戻って来た。まるで良く躡けられた犬のようだ。

つぶらな右目と相まって、そんな失礼な感想が浮かぶ。

「何も無い」

噤真からの報告も予想していたのだろう、表情一つ変えなかった。

「そうか。念のための札だけ貼っておくか」

言いながら既に戸口には、懐から取り出した札を張り付けている。

「部屋の中でも貼っていたようだけど。それは、一体何なのかしら？」

依頼主の許可も得ず貼られていくそれは、落草が見たことのあるどの護符とも違っていた。

そもそも神社などで貰う護符は、もっと仰々しい物だ。

梵字や真言などが書き連ねている筈なのだ。

だが、藤魅が手にしているそれは一見してただの白紙に過ぎない。

お陰で変に悪目立ちしてしまう。

いつその事、障子にでも貼ってもらえないかとくだらない事まで落草は考えてしまった。

「護符にしては何も書かれていないし、何かの役に立つのかしら？」

「坊主の小言よりは役に立つさ」

「あら、そう？とところで、今夜の探検はもうお終いなのかしら？だったら、助かるのだけど」

一しきり連れまわされてうんざりしているのがありありと窺えた。

楼主から店を預かっている身である落草には、女将としての仕事が生積みになっている。

長々と空けている訳にはいかない。

店の方を振り仰ぐ姿からは、かなり気にかかっているのだろう事が見て取れた。

「そうだな。一先ず、ここまです。切迫して命の危険はなさそうだしな」

確認して来た女たちの様子を思い浮かべて、藤魅も肯いた。

「戻って確認したい事もある…」

呟いて静かに藤魅を見上げている噤真を見た。

「噤真、お前はここに待機しておけ」

「ちよつと!？」

さらりと告げられた指示に、声を上げたのは落草の方だった。

「こんな店にこの子一人置いて行くと言うの！」

「そうだ。何か問題あるか？」

「問題って……」

二の句の告げない落草だったが、肝心の嚙真の方は少し首を傾げただけですぐに肯いて見せた。

「店の真ん中に飾っておけとは言わないさ。これでも、魔除けぐらいにはなる」

人の子を語っているとは思えない言い草だ。

「出来るなら、そうだな。症状の表れた女たちを一か所に集めて、そこにこいつを置いておけば良い」

「…分かったわ」

ひどく疲れた風情で額を押さえて、それでも落草は了承の意を示した。

これ以上、何を言っても無駄だと悟ったのかもしれない。

「嚙真くん、だったわね。騒がしい店だけれど、一晩お願いしても良いかしら？」

膝を屈めて優しく声をかけた落草に、嚙真はただ無表情に肯く。

差し出された手を迷いながら取って、最後に藤魅を振り返る。

サングラスに覆われた目元は、嚙真の方を見ているのかも怪しい。

けれど、一つ振られた手に嚙真は安心したように目元を和らげた。

隠し通路へと消えて行った二人を見送って、藤魅は再度賑やかな店を見上げた。

寒空の下。

絢爛豪華な筈の楼館は、やけにどんよりと重苦しく目に映った。

「おや、お帰り。藤魅」

住処に戻った藤魅を出迎えたのは、当たり前と言えば当たり前だが世々の朗々とした声だ。

昼間には、鍋だ何だと賑やかだったが、食卓に並んでいるのはいつもの飯茶碗だった。

「コートは自分でかけてくれたまえよ。ああ、夕飯の準備は出来ているぞ。食べるなら用意をしよう」

賑やかな声は聞き流して、いつものソファにそのまま横たわる。

冷え切った身体が、じんわりと温まって行く。

ため息を吐いた世々が、開いていた本を閉じて台所に立つ。

火の入られたストーブに薬缶を置くとしばらくしてシュンシュンと沸き立つ音がし始める。

「ほら、まずはこれを飲んで温まると良い」

差し出されたのは、湯のみに入れられた生姜湯だ。

「折角の鍋の準備が無駄になってしまったからね。他の野菜は良いとしても生姜だけは如何ともしがたくてね」

しみじみと言う世々の言葉に、藤魅は半身を起して湯のみを受け取った。

口を付ければ生姜の香りとおほのかな甘みが広がる。

「それで、仕事はどうだったんだい？ 嚙真くんはあちらに預けて来たようだけれど」

同じように湯のみを持ちながら、世々は揺り椅子に腰かけた。

ソファが藤魅の専用となっているように、この古い揺り椅子は世々の定位置となっている。

何処から手に入れて来たのか、毛織の膝かけをしてまったりと寛いだ姿だ。

彫の深い顔立ちに緩く波打った柔らかかな髪と派手な顔立ちをしている世々だが、意外とこの狭く古びた部屋にも馴染んでいる。

「接触はあったが、一足出遅れた」

「へえ、藤魅が逃げられるとは珍しい」

歯に衣着せない感想に、藤魅は僅かに眉根を寄せた。

「そんなにすばしっこい相手だったのかい？」

「いや…。感じた限りでは、そんな筈はない。ただ…」

考えるように押し黙ってしまった藤魅に、世々は肩を竦めて伏せてあつた本を取る。

「生憎と僕は、そちら方面には疎い物でね。まあ、出来ることがあるのなら言ってくれ。手伝える事があるのなら、ね」

世々には、藤魅や際真のような特別な力はない。

ただの一般人だ。

だからこそ、踏み込む場は心得ているつもりだ。

何より世々には、また別に仕事がある。

そちらを疎かには出来ない。

今読んでいる本も仕事関係の本だ。

遠い異国の文字で書かれたそれを読み解いて、翻訳するのが世々の仕事である。

最近発布された西洋学推奨令によって世々の仕事は引きも切らない状態だ。

退治屋としての収入よりも世々の稼ぎが上回る月も少くない。

「世々」

じっくりと再び読み始めた所で、珍しくも藤魅から声をかけられた。

「んん、なんだい？」

早速、何か頼み事だろうか。

幾分面白がりながらの問いかけだったが、続けられた頼みごとに端正な頬がひきつった。

「世々、お前女を買ってみないか」

きみがため 三

ふっと目を覚ますと、薔杏は薄暗い部屋の中にいた。どうやら、うたた寝をしてしまったらしい。

下ろしたままの髪がひんやりと冷え切ってしまったている。

うつ伏せていた文机から顔を上げると手にしていた平打簪が、転がった。

障子越しに差し込む月光を浴びて、真鍮の簪が鈍い光を弾く。

あの人、訪れなくなってもう何日が経つだろう。

ただ一目、垣間見るだけで良い。

そう願いながら涙する夜を終える術を知らず。

他の男の腕の中で、愛しい人の夢を見る。

綿入れを羽織って、障子をそつと開ける。

中庭に面した部屋からは、楼の外を見る事すら叶わない。

もしかしたら、今この時にこそあの方は、この楼の前を歩いているのかもしれないのに。

空しい想像に一人笑って、障子を閉める。

階下からは、楽しげな笑い声が聞こえて来る。

可笑しくもないのに笑って、好きでもない男に愛をささやく。

馬鹿馬鹿しい。

ひどく厭世的な気分で息を吐いた。

騒々しさに苛立ちすら湧いて来る。

何処のお大尽がやって来たのだろうか。

こんなに煩い夜は久方ぶりだ。

最近の花街は、何だか薄暗く沈み込んでいたから。

気分が優れないと言った薔杏を、普段なら厭味つたらしく睨みつける女将ですら、氣遣わしげに休ませてくれたぐらいだから。

悪い病が流行っているのだそうだ。

薔杏の親しい友人も何人か寝込んだきり、戻って来なかった。

次は、誰の番かと女たちの誰もが華やかな化粧の下で恐れている。賑やかな嬌声がひと際大きく蕎麦のいる部屋は響いて来た。同時に、鈍く頭が痛みだす。

ああ、ああ、会いたい。

あの人に、ひと目で良い。

会いたい。

簪を手にとるとそつと着物を羽織った。

仕用の華やかな物ではなく、地味な外出用の着物だ。

狭い部屋でじつとしてしていると気が狂いそうだった。

店から逃げる気はない。

そんな事したら、二度とあの人に会えなくなる。

だけど、このまま部屋に居たら身も世もなく泣き叫んでしまいそうだった。

少しだけ、少しだけ外の空気を吸おう。

襖に手をかけて、薄暗い廊下に出る。

その時、部屋の柱に奇妙な白い札が目に入った。

何も描かれていない札を訝しく思ったのは一瞬。

すぐにそんな物があつた事すら、忘れた。

だからこそ、蕎麦が通つた後、白かつた箸の札に鮮やかな藤に似た赤い紋様が浮かんだ事にも気付かなかつた。

十畳ほどの座敷には、螺鈿細工の箆笥が飾られ、艶やかな装いの花妓たちが並ぶ。

上座には、凜とした佇まいのひと際美しい花妓が彫の深い顔立ちの客に侍っていた。

どんな男相手にでも、極上の夢を与える事を自負している彼女たちだが、今宵ばかりはその笑顔もあながち作り物と言う訳でもない。

普段であれば、笑いながらも不品行な客は適当にあしらってしまう女たちが、先を争って上座で酒を傾ける男に酌をする。

華やかな光景に目を細める男は、異国の血が混じっているのか目鼻立ちのくつきりとした良い男振りだ。

最近、巷で噂になっていいる西洋劇の団員にもこんな華やかな男はいないだろう。

それに良いのは顔立ちばかりではない。

「こんなに美しい女性たちを、一人占めしてしまうのは、何やら罰でも当たりそうだ」

「あら、どちらかに怖い神様でもお待ちでいらっしやいますか」

しゃなりと笑って男の盃に酒を注ぐのは、胡染楼でも名のある花妓だ。

羽ばたく蝶の翅に似せて結われた黒髪には、八重の花妓である事を示す花簪が揺れている。

上品に奥方の存在を探る言葉を、男は笑いながら酒と共に飲み干した。

「残念ながら、こんな無粋な男に嫁してくれる菩薩様はなかなかなくてね。こうして花や蝶を愛でるばかりさ」

男が独り身であると分かると、女たちの目の色が変わる。

胡染楼は、花街でもかなり上質な部類の店に入る。

その分、客人も絞り込まれて来る。

上品で粋な遊びを弁えた年嵩の男が大部分を占める中で、今宵の客のように若く見栄えの良い人間はかなり珍しい。

だからこそ、少しでもお近づきになって、あわよくばと落籍されての裕福な暮らしと幸せな結婚を夢見てしまうのは仕方のない事だろう。

「そう言えば、蘭月殿。最近帝都では恐ろしげな話が流行っている」と専らの噂だが、知っているかな？」

「…雪降る中で、百話の怪談でも始めるおつもりですか？」

僅かに眉を顰めた花妓、蘭月はそれでも嫣然とした笑みは崩さなか

った。

「そう。怪談と言えば夏の風物詩。なのに、どうも最近の帝都は伝統と共に季節感も混乱の様相を来しているようだ」

「まあ、それこそ恐ろしい事のように聞こえます」

「国を憂う貴方の聡明さこそ麗しいものだよ」

白魚の様な、と言う贅美が良く似合う指先をそつと取り上げる。

口づける真似ごとをして見せれば、周りの女たちから嬌声が上がった。

当の蘭月は、切れ長の瞳を柔らかく細めただけだ。

流石に八重の花妓ともなれば貫禄が違う。

「恐ろしい噂話は、この花街では珍しくもありませんけれど」

スツと繋がれた指先を滑らせるように離す。

最後の一瞬に、軽く撫でるように離れた指の柔らかさは相手に対しての未練を掻き立てる。

世々は、にこりと笑うと蘭月の話に乗った。

「そうなのかい。ぜひ、聞いてみたいな。皆も、知っているのかな？」

周りの花妓たちにも水を向ければ、くすくすとした笑い声と共に一人、二人と話し出す。

他愛もない怪談話が続いた所で、一人の花妓が物々しい口調で話し出した。

「そう言えば、前にこの廓みせにいた妓こから聞いた話ですけど…」

すっかり季節外れの怪談話に興が乗ったのか、声を落としてゆつくりと語る声に皆が耳を傾ける。

時折、硝子戸を叩く風の音が良い具合に場の雰囲気盛り上げていた。

「その妓が言うには、見たらしいんですよ」

「…見たって？」

分かっているだろうに、恐る恐るの相の手が入る。

面白半分で耳を傾けていた世々は、蘭月が注いでくれた酒を一口呷

った。

清酒の辛味が心地良く喉を焼く。

空になった盃に如才なく蘭月が新たな酒を注ぎ入れる。

すっかり話に夢中になっている若い花妓たちとは違いそう言った所も抜かりない。

一口だけ口を付けて、盛り上がる話に耳を傾ける。

「たまたま、その妓が風邪を患って数日寝込んでいた時の話なんですけど。毎晩、亥の刻になると何処からともなく足音が聞こえるんだそうです。その妓も最初は、旦那様か他の妓が廊下を通っているんだろうつて思ってたみたいなんですけど」

こくん、とどこからか息を飲む音が聞こえる。

すっかり全員が話に引き込まれている。

そう言う世々もかなり興味は引かれた。

「でもね、おかしいんです。そこを誰かが通る筈はないんです。だって、その妓がいたのは端部屋で。旦那様が来る筈もなければ、廓も開いて忙しい時間に部屋に来る妓なんている筈ないんですから」

じんわりとした沈黙の後、小さな悲鳴がそこかしこで上がった。

どんな具合か忍び込んだ風が蝋燭を揺らしたらしい。大きく揺らめいた影に怯えた少女たちが、互いに寄り添って震えている。

「ふふ、どうやら今夜の話上手は決まったようだね」

ゆつたりと肘置きに凭れていた世々が明るく盃を干すと、ふっとその場の空気が和んだ。

「こんなに話術の巧みな花妓がいるとは思わなかった。ご褒美は、こんな物しかないけれど良いかな？」

世々が懐から取り出した包みに、また別の歓声が上がる。

可愛らしい和紙で包まれたそれは、この辺りではまだ珍しい西洋菓子だった。

貝殻に似た形の焼き菓子に、渡された少女は目を輝かせて周りの少女たちに見せている。

先ほどまでの異様な空気は吹き飛んだらしい。

「あまり騒ぐものではありませんよ。ほら、御礼がまだでしょうに」呆れた口調で蘭月が諭せば、綺麗な所作で一斉に花妓たちが三指と共に頭を下げた。

「ああ、大したものでもないけれど。喜んで貰えて嬉しいよ。ああ、そろそろ時間かな」

客人の持て成しの時間を計る為の香時計は、既に半分が燃え尽きている。

普段であれば、半分が尽きる前に前座の花妓たちは下がるのが通例だ。

座が盛り上がりすぎて、期を逃した事を知ると一斉に慌てた様子で座敷を辞して行った。

綺麗に人がはけた部屋の中で、世々は見事な引き際に声を立てて笑った。

「いやいや、見事だね。まるで水鳥が飛び立つ様を見たようだ」

「嫌なお人ですね。今宵は、皆下がるのが惜しかったらしい…」

しつとりと足を崩して身を寄せた蘭月は、それまでの凜とした仕草とは全く違う艶やかな色気を纏っていた。

それに気付かぬ世々ではない。

「おや、賑やかな席はお気に召さなかったかな」

「嫌いではないけれど。もっとゆっくりとした一時の方が今は大事」紅の引かれた眦がそつと閉じられ、しつとりとした呼気が近づく。

そのまま重なるうとした瞬間。

「邪魔をする」

無粋な男の声が、襖を開け放つ音と共に割って入る。

正絹の打ち掛けが涼やかな音を立てて畳に落ちると、世々の重苦しいため息が重なった。

「藤魅…」

恨めしげな表情を浮かべる世々にも、藤魅は素知らぬ顔だ。

「せめて、もう少し待ってなくても良いだろうに」

「時間がない」

「そうかい。まあ、そうだろうけれどね！」

分かっていたさ、と大げさに肩を落とした世々に、傍らに居た蘭月が袖口で口元を隠して楚々と笑う。

そこに先ほどまでの空気を惜しむ気配はない。

「続きは、また次の機会、と言う事かしら」

「…機会があれば、だね」

情けない返答に、蘭月の笑いがひと際大きくなった。

蘭月が座敷から出て行くと代わりに藤魅が、無造作にその場に胡坐をかいた。

ため息をついた世々が、それでも律儀に床に置かれたままの座布団を差し出す。

立ち上がったついでに、隅に置かれた朱卓から急須を取り上げてお茶を注ぐ。

さすがに花街でもそれと知られた楼館だ。

さり気なく置かれた茶葉も香り高い高級品だ。

香ばしさの中に清しい甘さを含んだ玉露の香りを満足そうに嗅いで、藤魅へと差し出す。

熱いだろう湯のみを頓着なく掴んで一口すすする。

こうした時に、世々は藤魅と言う存在を現の物か心もたなく感じてしまう。

何しろ、どう考えても入れたての緑茶は即座に飲めるような代物ではないからだ。

「藤魅、君の舌は色んな意味で人智を超えた存在だと思っよ」

「何の話だ」

火傷一つせずに支障なく言葉を紡ぐ藤魅に、何でもないと肩を竦めて返す。

「まあ、言われた情報の方は集まったと思うけれどね」

「聞かせてくれ」

「他愛ない噂話がほとんどだったから、役に立つかは分からないがね」

先ほどの季節はずれの怪談話を順に話して聞かせる。

さすがに、片手を越える数の怪談を連続で聞いていたら細かい場所は忘れてしまう。

それでも一連の流れとオチくらいは正確に伝える。

世々の朗々とした声が最後の花妓の悲恋を語り終える。

少々、余分な情景描写などは加わったのは静かな聞き手に対するちよつとした意趣返した。

しかし、藤魅は最後まで口を挟まずに無表情に聞き終えると何かを考ふる時の癖で指で畳を叩きだす。

単調な音は、畳に吸い込まれてほとんど響かない。

世々が手にしていた玉露がちよつど良い温度になった頃。

正確な音を刻んでいた指が止まる。

「なるほど…」

「何か分かったのかい？」

「ああ、どうやら意外と面倒くさい仕事らしい」

吐き捨てる様な口調だったが、形の良い唇は薄っすらとした笑みを浮かべている。

「それは、それは」

意味のない繰事を口先で呟いて世々は、手にした緑茶を啜る。

藤魅が機嫌が良いと言うことは、もうある程度の状況は見通せたのだろう。

そうなれば、世々が言う事など何も無い。

せいぜい無茶をして、せつかくのお客の機嫌を損ねないで貰うよう気を配るくらいだ。

「ああ、そう言えば噤真くんはどこだい？廓にはいるんだらう？」

「噤真なら魔除け代わりに置いて来た。伏せった女たちの傍に居る

ように言ったから、その辺りにいるだろう」「
何ともひどい話である。

際真に対する藤魅の態度は、世々に対するそれに輪をかけて淡泊だ。十分すぎるほど知っている世々は、今回の事にもただため息を押し殺すだけで何も言わなかった。

「それなら、少し顔を見てから僕は帰るよ。どうせ君は、これからまた一働きするんだろう?」

問いかけにもならない口調だった。

肯く藤魅に、小さく笑って立ち上がる。

「この仕事が終わったら、今度こそつみれ鍋を作って三人で食べよう。なるべく早く仕事を終わらせてくれよ」

華やかな笑顔で片目をつぶって世々は座敷を出て行った。

大柄な背中が出て行くのを見送って、藤魅は格子戸から除く夜の花街を挑むように一つ睨むと同じように座敷を後にした。

きみがため 四

会いたい、会いたい。

あの人に会いたい。

一目会えたら。

ただ、それだけで良いのに。

夕闇の迫った廓は、ひっそりとした昼間の薄絹を纏った静けさを脱ぎ去ったような艶めきを持ち始めている。準備に追われる女たちや駆け出された男衆たちが上にと走り回っている。

一重や三重の花妓たちであれば着付けも一人で行えるが、八重以上の花魁ともなればその仕度はかなりの労力が割かれる。

帯一つにも数人がかりの作業だ。

禿の少女たちも袱紗に包まれた簪を手に大人たちの間をくるくると忙しそうだ。

そんなある種賑やかな活気に満ちた廓の一角。

まるで喧騒から隔絶された一室に噤真はいた。

廓に飾っておけ、とは藤魅の弁だが落草は大きな広間を一つ都合し
てくれた。

原因不明の病に倒れた娘たちを寝かせた部屋の中、噤真は用意された籐椅子に座ってじっとしていた。

可愛らしく整った色白の容貌は、整っているだけに削ぎ落された表情によって凄みをもつ。

奇しくも藤魅の言ったように、飾られた人形の様にも見えた。

綺麗につま先を揃えて座って、微動だにしない。

差し込む夕焼けの明りは、白皙の頬を赤く染め上げる。

だが、それも少しずつ翳って行き、しばらくすると薄っすらとした闇に落ち込む。

通りを照らす提灯の明かりがわずかに部屋に届くばかりだ。

手近に置かれた蠟燭にも触れず、ただじっと佇む。

聞こえて来るのは、昏々と寝込む娘たちの荒れた息の音だけだ。

ただの子どもであれば、いや大人であっても気が滅入ってしまいうな部屋の中。

不意に嚙真の大きな瞳が瞬いた。

部屋の四隅に貼られた藤魅の白い呪符がじんわりとその色を変える。水が染み出るように真白の表面が赤く染まり、やがて藤の花に似た紋を象る。

艶やかな花の一房が出来あがった頃。

静かな広間に、しゅるしゅるとか細い音が届いた。

それは板間を擦る絹の音だ。

常であれば合わせて足音も聞こえて来るものだが、これは違う。

絹の裾が床を舐める音だけが妙にハッキリと聞こえる。

嚙真は、近づいて来る音をただ静かに聞き続けた。

衣擦れの音が最も近づいた時、四隅の呪符がチリチリと震えだした。

かすかな女の泣き声も届く。

女の嘆きにあわせるように赤く染まった呪符の花紋が色を変える。

真紅から蘇芳へ。

蘇芳から紫紺へ。

やがて、大輪の花が開くようにして呪符は金色に染まった。

(…どこ？だんなさま、どこにいらっしやいます)

男を探し求める女の声が悲しく響く。

(どこです？お待ちしておりますのに…)

下ろしていた両足を嚙真はひっそりと抱えた。

ゆっくりと女の声は遠ざかって行く。

床を舐めていた衣擦れもかすかな余韻を残して消え去った。

チリチリと震えていた呪符も女の気配と共に白紙に戻る。

そうして、静かになった広間で噤真はしばらく膝を抱えたまま身動き一つしなかった。

「噤真くん？」

息を潜めるように蹲って幾時か。

滑らかに開かれた襖から廊下の光が真つ直ぐに伸びた。

ちょうど光の端に引っ掛かるようにして椅子に座る噤真の姿が浮かび上がる。

ゆっくりと顔を上げた噤真に、やって来た世々はわずかに微笑んで唇に人差し指を当てた。

眠る娘たちに気を遣ってか、ひっそりとした足取りで部屋の中に入ってくる。

「一人で、良くやっているね」

大きな手が優しく撫でて来る。

いつもは大きく朗々とした口ぶりで話す世々だが、声量を落とすと柔らかな声音が辺りを包むように優しくなる。

強張っていた手を下ろして噤真は世々を見上げた。

「ん？何かあつたのかい？」

じつと見上げて来る瞳の強さに世々が噤真の頭を撫でたまま首を傾げる。

「藤……」

「藤？藤魅に何か伝えるかい？」

そこそこ長い付き合いのある世々だからか、辛うじて噤真の片言で言わんとしていることを汲み取る。

噤真と完全な意思疎通が成り立つのは、藤魅くらいしかない。

「札、金色になった」

「ふむ。金色にね」

顎に手をやって四隅の札を見上げる。

今はただの真白の紙としか見えない呪符の効力はさすがに世々も知っている。

「となると、季節外れの怪談も馬鹿には出来ないと言うことか」

一人呟いて世々は、最後にもう一つ噤真を撫でて立ち上がる。

「伝言は預かったよ。僕はもう帰るから、噤真くんもあまり無理をしないようにね」

来た時と同じように、世々は足音を忍ばせて帰って行く。

大きな背中をじっと見送って、噤真はまた行儀良く椅子に座りなおした。

世々が出て行ったあと、藤魅は半身とも言える刀を携えて廓の外に出ていた。

通りをぐるりと胡染楼を囲むように回る。

軒先につるされた百を超える提灯や雪洞に照らされて廓は夜闇に煌々と浮かびあがっている。

表門に続く大通りでは多くの人間たちが行きかっている。

一本路地を引つ込めば人気は格段に減る。

だが、皆無になる訳ではない。

人目が少なくなるだけに、逆に表通りよりも濃い空気が漂っている。電燈の光が届かぬ場所では、妙に距離を詰めた男女の姿がある。

そちら側はあっさり無視して藤魅は廓の周りを一周してしまう。

「変化はない、か」

吹きすさぶ寒風にさすがに身体が凍えて来る。

一度、廓に戻ろうと踵を返した所でざわりと背中が総毛だった。

咄嗟に振り返るが、既に先ほどまでの気配はない。

行きかう旦那衆や客寄せの女たちばかりだ。

だが、それを気のせいだとは切り捨てられない。

かすかに残る気配を追って人混みの中を駆け出した。

鬼の気配を言葉で言い表すのは難しい。
敢えて言うのなら、冷気に似ている。
触れた先から総毛立つような、凍える雪の欠片のような物だ。
一瞬の冷たさは、けれどすぐに雑踏にまぎれてしまう程度の希薄な物。

消えかけたその雪の花のような欠片を追って藤魅は走る。

やがて、電燈が消えかけた人気のない道に出る。

花街を東西に分ける小川。

朱塗りの欄干を備えた小さな橋の中央で藤魅は足を止めた。

その昔、橋の上で有名な少年が大男を仕留めたように。

藤魅も橋の彼岸に立つ男を見つめた。

ちらつくガス灯の明りがギリギリ届かぬ場所に立つ男は、帝都の闇を纏っているように姿はハッキリとしない。

辛うじて捕らえられた姿は、くたびれた浪人のような姿だった。

草臥れた編み笠を目深にかぶって静かにそこにいる。

藤魅は誰何の声すらかけなかった。

ただ、無言で抜刀する。

シンツ、とかすかに刃が夜を揺らす。

彼岸の男も腰に手を当て構えを取る。

間合いを詰めたのは藤魅の方が先だった。

力を込めたつま先で橋板を蹴る。

ほぼ一歩で相手を自らの間合いまで引き込む。

キインと甲高い音が鳴って刀が十字に切り結んだ。

間近となった男の顔は編み笠のせいかわ、窺い知ることには出来ない。

火花が散りそうな程にぶつかり合った刀は、けれど男の力任せの打ち上げによって離れる。

身体ごと持って行かれそうな巻き上げに藤魅は飛びずさるように後退し、隙を逃さぬ連撃を辛うじて避けた。

幾つかの打ち込みを片手で捌いて、更に踏み込んで来た男の肩を振り上げた足で思い切り蹴り飛ばす。

刀の動きばかりを追い駆けていた男は、思わぬ方向からの攻撃にた
まらず地面に叩きつけられる。

だが、そのまま勢いを殺さず受け身を取ると無言の気合と共に振り
上げた藤魅の一刀を紙一重で受け止めた。

重く高い音が、静寂を切り裂いた。

脳天を割る勢いの一撃を腰を落とした体勢で受け止めた男の頭から
切り裂かれた編み笠が落ちる。

既に顔を隠す役目を果たせなくなった編み笠はころころと転がり、
往来の真中で風に流れる砂のように消える。

編み笠が隠していたその奥。

爛々とした獣の目が輝いていた。

隠す物のなくなった筈の顔は、けれどその造作を確認はできない。
わずかに扱けた顔の輪郭を覆うのは、泥の様な闇だ。

粘つく液体のように糸を引いて顔を形作る部位から流れ落ちる闇の
塊。

「もう、人の形を留める事も出来ないのか」

皮肉気に笑った藤魅に、吹きすさぶ風のような唸りが響く。

人の声とは思えぬ唸りで藤魅の刀を押し返した。

予想外の力に、藤魅が体勢を崩す。

それでも、わずか一歩で踏みとどまる。

即座に攻撃に備えて返した刃を構えたが、すでに男の姿はない。
分が悪いと見てとったのか、潔いまでの引き際だ。

「…ちつ、逃げられたか」

「舌打ちとは物騒だね」

「世々か」

背後からかけられた声に、顔だけ振り向かせる。

「あからさまに面倒くさそうな顔をしたね、君。まあ、良いけれど」
やれやれと肩を竦めて返した世々は、廓を出て帰る所なのだろう。

毛皮の襟飾りも派手な外套を粹に着こなしている。

そうして気付けば、先ほどまでの静けさなど夢のように掻き消え煩

いまでの雑踏が戻って来る。

「帰るのか」

「ああ、僕も明日は予定があるからね。そうだ、嚙真くんから伝言を預かっているよ」

「嚙真から？」

「そうそう。どうやら幽霊が出て来たようだよ。札が金色に光ったそうだから」

遊郭と言えば花妓の幽霊と言うのが定説かな。

唄うようにそらぶいて世々は往来をゆったりと去って行く。

藤魅からの返答は特に期待していないらしい。

悠々と去って行く友人を一瞥だけして、藤魅は夜空を覆う妓楼を見上げる。

「蝶を誘うのは、やはり花の役割か」

ぽつり、呟いて藤魅は胡染楼へと入って行った。

「今度は一体何を始める気なのかしら」

日が高く上った翌日。

落草は頼まれた幅広の白絹を手に座敷へと入り深々とため息を吐いた。

今日の落草は、柳色の扇小紋に銀鼠の帯、薄群青の帯締めときつちりと纏めている。

何処ぞに用向きがあったのかもしれないが、それは藤魅の知る所ではない。

呆れた口調でやって来た落草から受け取った白絹を畳の上に広げる。ちょうど藤魅が両腕を広げた程の幅がある白絹の布はそれだけで座敷の半分ほどを埋めてしまう。

「藤、はい」

隅で待機していた嚙真が甲斐甲斐しく立ち動いては、筆や岩絵具と

思しき小瓶を手渡して行く。

「これから、鬼の絵でも描こうと言うの？」

白い小皿に岩絵具を盛り、膠液を少量入れると指でとく。工程を見ればただの絵を描く為の下準備だ。

邪魔にはならないよう座敷の襖近くで眺めていた落草は、胡散臭そうに藤魅の一連の行動を見つめている。

この数日で、藤魅への評価は限りなく目減りしている。

能力を疑っている訳ではないが、如何せん人間としての付き合い方に問題があり過ぎるせいだ。

「これから花を捕まえる」

「え？」

唐突な言葉に、一瞬間き取り損ねた。

自分の前言に対する答えだと気付いたのは、その一拍後だ。

「どう言う意味かしら？あの妓たちの病の原因は掴めたの？」

「原因は掴めた。だが、どちらが元凶なのかはこれから確かめる。思わず落草は天井を仰いで、その腹立たしいほど涼やかな横顔を眺める。

「貴方と話していると自分がとんでもなく愚か者になったような気がするわね」

「詳しい説明なら、後でしてやる。今は、こちらが先だ」

獲物を愛刀から筆に持ち替えた藤魅は、真剣な表情で白絹と向かっている。

とは言え、その表情も半分はこんな時でも外さないサングラスの影で窺い知ることは出来ないのだが。

これ以上は、何を言っても答える気はないのだろう。

ため息を吐いて、それ以上の言葉は喉の奥にしまう。

そうして、その場にそつと膝を折った。

長くかかるのだろう事は今の作業からも汲み取れた。

ならば、もう諦めて待つだけだ。

途中で通りかかった下女に、念のために急須を頼む。

恐らく飲まれることはないだろうが、落草自身の為にもお茶がある方がありがたい。

そうして、その予想通り落草が何杯目かのお茶を淹れなおした頃、一心に白絹と向かい合っていた藤魅が顔を上げた。

「よし。噤真、そちら側を持って。重ならないように気を付ける」
こくりと肯いた噤真が落草の前を通り抜けていく。

そうして指示された白絹の端を持ち藤魅と共に持ち上げる。

丁寧に持ち上げられた白絹には、岩紅や辰砂、淡口紫と言った色合いで見た事もない図案が描かれていた。

見ようによつては、梵字の様にも見えたし、下手な絵師が描いた何処ぞの風景とも見えた。

「これは…?」

「霊寄せの図だ」

「たまよせ?」

聞き慣れない言葉に落草は端麗な眉を顰める。

「霊を寄せると書く。その字以上の意味はない」

簡素を通り越した説明にも、だいぶ慣れて来た。

ようは幽霊、人の魂を呼び寄せる為の図柄と言う事らしい。

だが、引つ掛かったのは別の事だ。

「霊を寄せるつて、何故?私が頼んだのは鬼退治の筈でしょう」

もちろん、この怪異が収まるのであれば鬼であれ、幽霊であれ大差ない。

だが、この帝国では“鬼”と“霊”では根本的に違う存在とされている。

鬼とは、人間の魂や無念、情念などが凝り固まって肉体を得た物だ。常人であれば見る事の叶わぬ魂や恨みつらみと言った感情も鬼となれば、どんな人間であれ見る事が出来る。

霊となれば、鬼となる前の段階であり、素質のある人間以外目に触れる事もない。

藤魅は鬼を退治る事を専門としている人間だ。

人魂の対処となれば、坊主や神官が主とする領域になる。

それとも、こんな身なりで念仏でも唱えるのだろうか。

自分の想像にあり得ないと落草は首を振る。

「もちろん、退治するのは鬼さ。俺には幽霊なんて物は…見る事も出来ないからな」

自嘲に混じった僅かな寂寞。

落草が感じ取る事も出来ない程にわずかに滲み出た感情は一瞬で拭い去られる。

「それなら、どうやってその見も出来ない幽霊とやらを呼ぶつもり」

「俺には無理だが、出来る奴がやれば良い」

「だから、それを一体誰に頼むと…」

苛立ち混じりに言葉を返していた落草は、途中でハツと口をつぐむ。何処か愉しげな笑いを浮かべた口元は、ハッキリと座敷の中にいる人間に向けられている。

「まさか」

信じられないと目を丸くした落草に、藤魅は手を上げてその名を呼ぶ。

「噤真、印は描いた。後はお前の仕事だ」

無造作に投げられた言葉に、噤真は、まだ年端もいかぬ少年はいつもと同じように小さく肯き返す。

まだ、信じられないと噤真と藤魅を見比べる落草に、藤魅はどかりとその場に腰を下ろして口を開いた。

「アレでも力はある。仕損じる様な相手でもない」

「…そう言う意味ではないでしょう」

帝都では、幼い頃から働く子どもなんて多くいる。

それこそ噤真ほどの年になれば大店に丁稚奉公に出されてもおかしくない。

だが、それにしただって店の掃除や遣いに出るのが精々だ。

誰がこんな稚い少年が、人魂を呼ぶなんて所業をこなすと思えるのだ。

心底疲れたと額を押さえた落草に、藤魅の方は悠々としたものだ。勝手に用意された急須から冷めたお茶をついで一服している。

「ひとまず、準備は終えた。また、夜になるのを待つしかないな」

「昼では無理なことなの？」

素朴な疑問が飛び出す。

「別に昼でも呼ぼうとするなら出来るだろうが。今回は駄目だな」

「そんな制約があるものなのね」

半分、呆れ交じりの言葉に藤魅は薄っすらと笑い返す。

「夜にしか咲かない花もあると言う事だろう」

相も変わらず、顔半分は暗いガラスに隠されて見えない。

だが、口元に浮かべられた何とも言えない凄みの籠った笑みは落草を沈黙させるには十分だった。

一瞬で飲まれかけた己を叱咤して、どうにか背筋を伸ばす。

「良いわ。では、その待つ時間の間に詳しい説明をしてもらいますよ
うか」

「…まあ、そうだな」

すぐに素っ気ない表情を浮かべた藤魅は、それでも拒否する事はなく二杯目のお茶に手を付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4495s/>

天に海原 土に雲

2011年6月17日03時10分発行